



信仰 × はは





この部屋
ですね

お邪魔
致します

ガク









デカパイ
もだ

はい♡

ハルハル♡



信仰に
目覚めた
ようだな♪

ああ♡このような
尊い信仰とも
知らずに…
私は♡



これは…♡
なんて素晴らしい
教義なのでしょう♡



開祖様の愛…♡
エロセックスで
皆が一つになる♡



許そう

バキッ

そしてお前の
全てをワシに
話すのだ

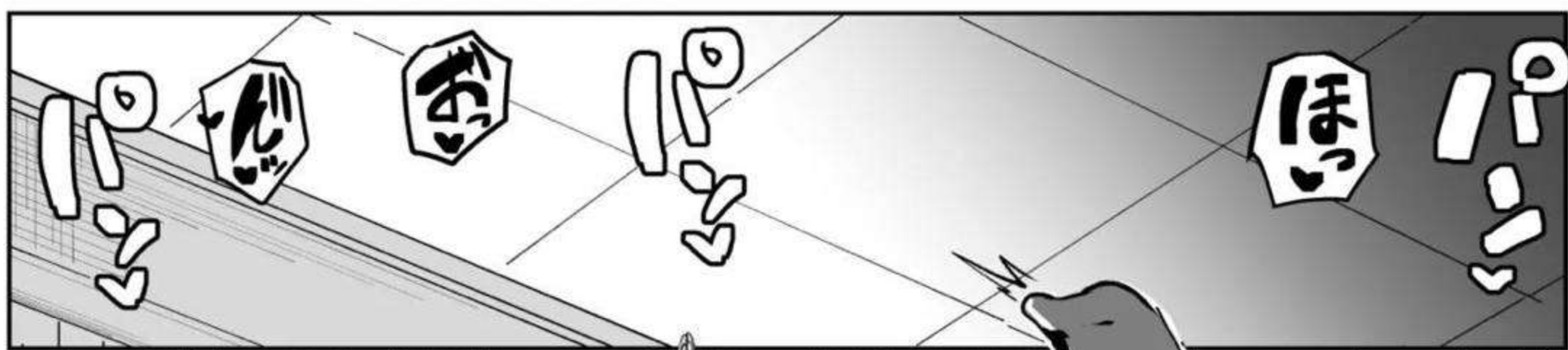


いっ♡

いっ♡

いっ♡

いっ♡





マッラ
アッモル♡

ヨル先輩

結婚まで
嘘だった
なんて
マジひどい♡

ホント反省
して下さい♡

マッラ
アッモル♡

まっこれからは
同じ愛徒…
いいですけど♡

新しい愛徒に
祝福を

おひんぽ
汁っ♡



我が信仰
洗脳術が
解けかけておる

この女
耐性持ちか

おちんぼ
しゃま?

ほい

ええー!!
ならもっと強い
信仰を与えて
やって下さいっ

れ

これ以上の信仰を
ムリヤリ与えれば
後遺症を残すことも
ありえる

先輩
めんどすぎ

偽りの
記憶からの
暗示:

信仰への
誘導と
くりかえし:

なるほど
悪くない

弱い洗脳術は
どうでしょう?

せんぱい
舌だして
下さいっ♡



あれは…

聖…棒…？



あつ♡
そう…♡

そうでした♡

今日は皆さんに
誘われて

先輩

家でもお祈り
忘れないで
下さいね♡

礼拝に参加
していたの
でした…♡



どうりで
ムラムラする
はずです♡

忘れていたのは
お祈り♡

まんこが
広がります♡

ほお♡

ブルン。

ゾク

ゾク

聖棒を使った
ドスケベ
お祈り
オナニーです♡

そうにゅう♡
完りよあっ♡







とても不思議です
お仕事中に
開祖様のおちんぽを
しゃぶっていても

だれも気に
しません♡

これが我が
マッラ・アッモル教の
愛を与える力だよ



愛を与える…♡
素敵な響きです♡

課長のちんぽ
ピンピンに勃起
してますよ♡

これは
その…

あん♡
一緒に愛を深め
あいまず？

ここの皆は
カミラ愛徒達に
よって
愛を与えられた

ベベロ



愛の力
スゴイ…♡

はあ♡

バキバキの
芯入りのちんぽに
なりました♡

カッコいい
です…♡





皆を愛の力で
共に救うのだ

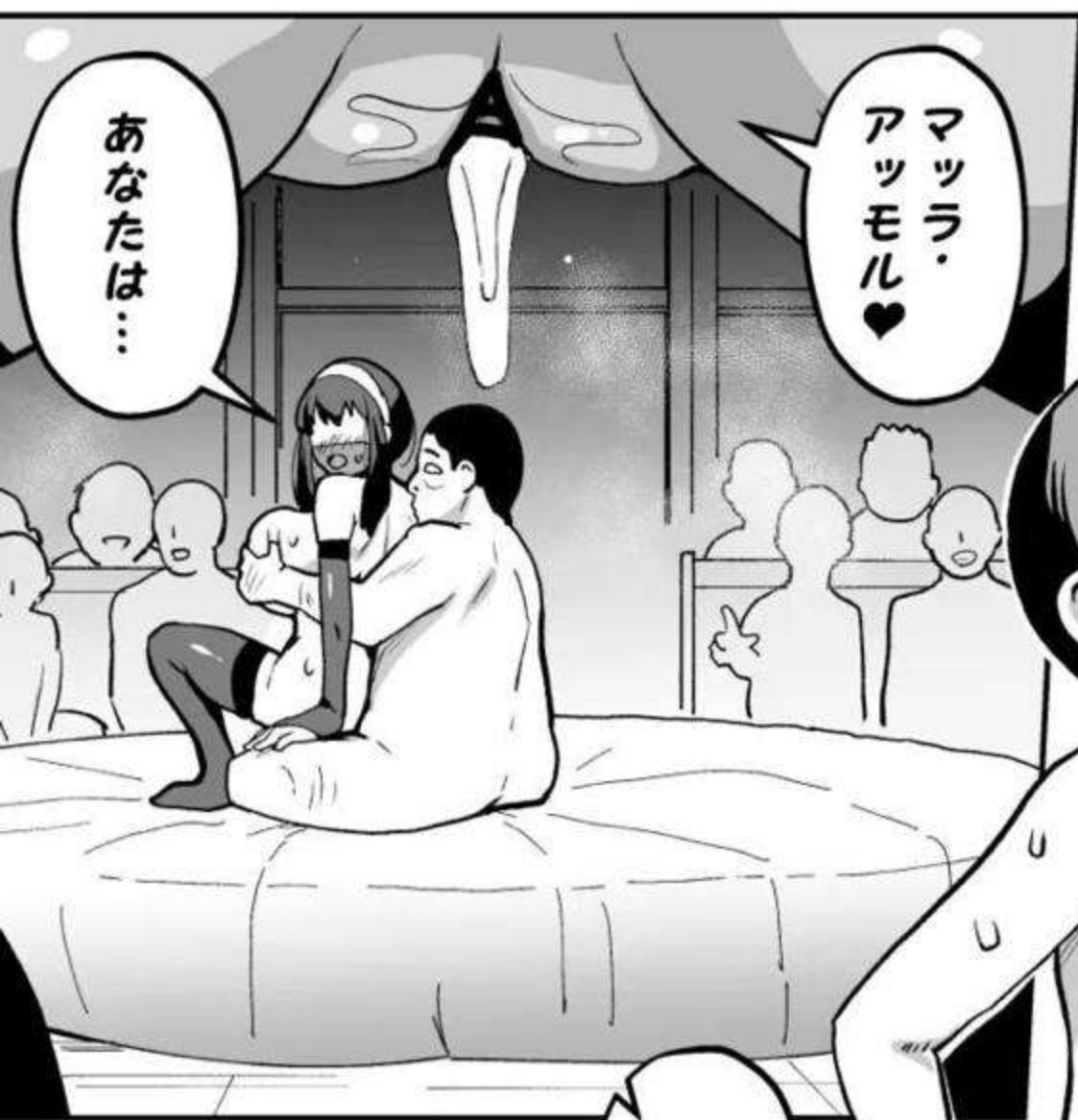


マッラアッモル教
礼拝所



しかしいばら姫が
こんなスケベな
女だったとはW

ほほ
これがあの…
流石開祖どの



そこで
開祖様に出会い
愛に染めて
頂いたんです♡

いっばい全部
話ました♡
だから下さい♡

ご褒美
ご褒美の
中出し♡

ほお

ほ



15
15
15

彼女の情報には
いつも助けられて
いるよ

まんこも
スケベで
好評だ

開祖様の
ためなら
なんだって
しましゅ♡

誰とだって
スケベ
しましゅ♡



開祖様…♡





ただいま
帰りました

はは
おそい

ああ…
今日も
素晴らしい
礼拝でした♡

ロイドさんは？

まだ体が
愛で
あふれて…♡

ちちようじで
でかけた

…そう
ですか♡

ロイドさんが
いないなら
少し激しく
お祈りしても
大丈夫ですね♡

アーニャさん

私…

覗かないで
と言いました
よね？

びびび





朝から晩まで
ちんぽとまんこ
繋がっていたい♡

アーニャさんも
大きくなったら
一緒にやり
ましょうね♡

やる

汗だくになり
ながら
べちよべちよの
交尾したい♡

開祖様と
一日中……
愛のセックスを
ずっと……♡

ここに
開祖様の
おちんぽが
入るんです♡

おおー

アーニャ
夕食ができた
からヨルさんを
呼んできて
くれ

アーニャいま
いそがしい

ここ数日
ヨルさんの
様子がおかしい……

また
また

いや違うか
ヨルさんは
何も……

ヨルさんは
ただ……

ただあの男と
セックスして
いるだけだ

はげし♡

好きだろ？
激しいの

おかしいのは
声もかけずに
覗くようなことを
している
俺のほうだ……

すき♡





キューン
キューン...

おはよう
ございます♡
開祖様♡

ん

朝のめざまし
パイズリ礼拝の
お時間です♡

愛徒としての
起こし方…
らしくなって
きたなw

全ては
開祖様の
おかげです♡

つば
失礼します♡

ゆるす

クク…この数日
じっくり何度も
信仰を与え
続けた…

あはん♡
ちんほ様
あついです♡

もう解ける
心配は
ないだろうw



マッラ
アッモル教
教団本部







だが
びん
愛徒最上位
ワシの妻になる
ということとは
分かっているな？

ん
あ
か
なるほど
これは決意の
ということか
あん
あん

あん
あん



いっ
いっ
開祖様の
ことだけを愛し
開祖様の
ことだけを
考え
開祖様の
ためだけに
生きます
そして
赤ちゃんを
孕みます

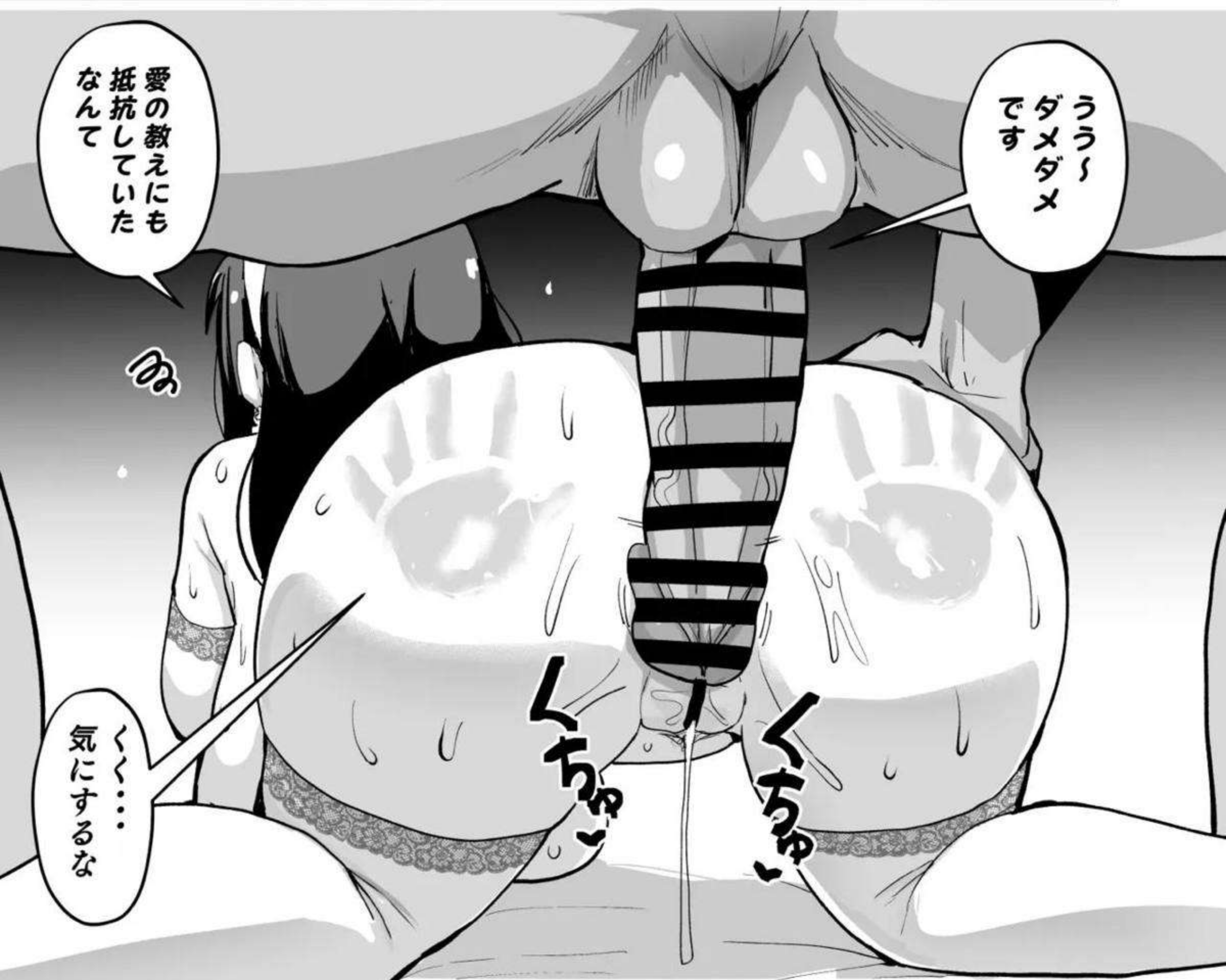


あー
あー
開祖様の
お



あ…
ああ…

わたしはなんと
いうことを…



ううゝ
ダメダメ
です

愛の教えにも
抵抗していた
なんて

くく…
気にするな



とっくに
全て許して
いる

お前は
ワシの妻に
なるのだぞ？

ああ
開祖様

好き
です

準備運動の
一発目だ
どこにだす？

なかあ♡

妻の
コキ穴まんこに
ビュっしへ♡

えづ

ほい

愚かな私に
本物の愛を
与えてくれた
開祖様♡

まみんの
イグググ

ド
パイッ

孕み
たがりめ
イケ

妻の
私が♡

開祖様の
邪魔する奴は
全員殺します♡

まだ
いづ

イグググ
イグググ
イグググ

あん
ぐい

いづ

いづ

バクッ
バクッ







マッラ
アッモル♡

まさか
先輩が
妻になる
なんて...

マッラ
アッモル♡

赤ちゃん
羨ましい...

くやしいなあ♡

開祖様
愛しています♡

私も
いつか♡

スキです♡
開祖様♡

ちゃんぽ様
万歳♡

マッラ
アッモル♡

ボーイ♡

マッラ
アッモル♡

愛を♡
ちゃんぽ様♡

マッラ
アッモル♡

開祖様♡

ああ...
開祖様
かっこいい♡

つづく...

スパイ×NTRファミリー悪魔の子に関わったばかりに寝取られてしまう大切な人達」

日高久志

(ど、どうということだ……?)

朝、洗面台に水を張り、顔を洗っていたロイドは鏡に映る自分を見て愕然としていた。

スパイとして身なりに気を使っているロイド。自身の容姿もストイックに管理していたつもりだった。

それなのに……見て分かるほどに頬がこけている。

(これでは……ま、まるであの薄気味悪いドノバンのようじゃないか……)

真っ先に頭に浮かんだのは、オスタニア国家統一党総裁で、オペレーション“梟”の標的。得体の知れない男の不気味な顔だった。

ロイドの目の下には隈も出来てしまい、金髪には少し白髪が交じる。

年齢差はあるにしても、今の自分は仇敵を想像させる有様となっていたのだ。

(まずいぞ……ヨルさんに心配をさせてしまう……!)

偽物家族とはいえ、純粋なヨルさんは本気で気遣ってしまっただろう。

任務に付き合わせている負い目もある。

気苦労はかけたくない。

栄養価の高い食べ物を大量に摂取して誤魔化す必要がある。

「ロイドさん、失礼しますね」

その時だった。洗面室の扉が開き自然とヨルが入ってくる。

ロイドは身じろいだが、それをヨルには感じさせない。

平静を装って、「どうかしましたか?」と作り笑顔を全開に向き直ろうとした。

だがすぐに「ひゃうっ!」と情けない叫び声をあげてしまう。

「朝から……元気がないと思っていました。

だからこうして……お手伝いにきたんです」

背後から枝垂れかかったヨルが、自然とロイドの股下に手を伸ばす。

そして股間をパジャマの上からモミモミと慣れた手つきで揉む。

「や、やめっ……!」

ああうっ! なっ……!」

ロイドがヨルと大人の関係になったのは、つい一週間前のことだ。

寝込みを襲われてなし崩しだったが、それから毎日のように夜を共にしている。

正直、ロイドにも分かっていた。

自分が痩せてしまった原因は、きっと……彼女の抑えきれない性欲にあるということだ。

「ア、アーニヤが起きてしまうっ……ううっ! だ。だめだっ……!」

「ロイドさんが声を抑えれば、バレません」大丈夫です」

ムギムギと陰囊を揉みながら、竿も刺激する。不本意なのに、抵抗できない。

ムクムクとパジャマを押し上げていく。

「……ここでヌイてしましましょう」

ロイドさんもその方が興奮すると思いませんか?」

ズボンとトランクスを器用につまみ、ヨルは大きく引っ張ってすり下ろしていく。

露わになったイチモツが、ピョンと反り返った。

「だ、だからこれ以上は……!」

さすがにロイドもヨルを振り払おうとした。だがギュッと陰部を掴まれてしまう。

「いきゅううっ……!」

情けない声をあげて力が抜ける。

するとヨルが弄ぶように、シコシコとイチモツを扱き始めた。

そうなるとロイドもされるがまだ。

ハアハアと荒い息を吐きながら、ヨルに身を任せる他ない。

「赤ちゃんみたいな吐息ですね♪
本当に……ロイドさんは可愛いです♥」

「そ、そんな……
ああっ！ヨルさんっ……！」

鏡に映る自分が快楽によがる姿を見せられる。
舌なめずりをするヨルの姿も。

どんな任務もこなしてきたロイドには、全ての事態
を自分のペースで解決してきた自負がある。
プライドと言ってもいい。

それをへし折られているのをヒシヒシと感じた。

（フォ、フォージャー家の主導権は……
もうヨルさんのものだ……）

「くあっ……！も、もうっ……！……！」

「はい♪遠慮なく出してしまってください。
早漏……ロイドさん♥」

ドピュドピュッ……！

崩れ落ちるように膝を折り、床に精液を撒いてしま
う。

情けなさにロイドはヨルを弱々しく見上げた。

ヨルは指についた精液を舌で舐め取りながら、邪悪
な笑みを浮かべている。

まるで殺し屋がナイフを舐めているかのように。

「今夜も寝かせませんから♪
楽しみにしててくださいね、ロイドさん♥」

「は、はい……」

ロイドは気圧されながら、項垂れる他なかった。

（ちち……ピンチ……
もうげんかい……）

アーニャは洗面所の扉越しに超能力で二人の心を読
んでいた。
だからフォージャー家が崩壊しそうになっているこ
とが分かる。

ロイドの焦燥も。
ヨルの企みも。

そして……“誰がこんなことをさせている”かも。

（じなん……どうして……）

得体の知れない同級生。

額に666の紋章を持つ悪魔の子。

ダミアン・デズモンドの妖しい笑顔を思い浮かべ、
アーニャは一人唇を噛むしかなかった。

—————

デズモンド邸で開かれるお茶会。

そこにアーニャとヨルは招待されていた。

夕刻、イーデン校を後にした二人は、迎えの車に乗
り込み、そこへ向かう。

アーニャは嫌で嫌で仕方なかった。

心の声が聞こえない……

あの同級生ダミアンがいるからだ。

テレパシーはほぼ万能だ。

イーデンで心を読めなかった人間はいない。

それなのに、ダミアンだけは違う。

読もうとすると、どす黒い何かに塗り潰されてしま
うみたいだった。

会いたくないし、関わりたくない。

フォージャー家の一員でいる為には仕方ないとはい
え、側にいたらおかしくなってしまうそうだ。

「いらっしやい。

必ず来てくれると思っていたわ♥」

ダミアンの母、メリンダ・デズモンド自ら玄関口に

立ち、ニッコリと笑いながら頭を下げる。

ヨルも嬉しそうに「はいっ♪昨日から楽しみで♥」
と微笑むと、メリンダに駆け寄った。

メリンダの視線がヨルの身体を舐め回すのように見
ている。

アーニャは心の声に戦慄した。

『この牝豚、思った通りだわ。

ご主人様に抱かれただけで体つきが牝豚そのものにな
っているわね♪

撫で回したくなるヒップライン。

形のいい巨乳。

オマンコの締めりもきつと……

ご主人様を満足させるものでしょう♥
悔しいわ。妬ましいっ……！』

満面の笑みの裏で嫉妬の炎をメラメラと燃やすメリ
ンダの二面性。

そしてそれに気付かないヨルの心の中はもっと恐ろ
しい。

『ああっ♪メリンダさんは私がご主人様に出会うず
っと前から一緒にいるんですね♥

羨ましい♪ご主人様の言う通り、母親というのはお
子さんの精液排泄便所ですから……♪

私よりもいっぱい濃い濃厚ザーメンを注いで貰
っているのは確実う♥

んふうっ♪……私もアーニヤさんじゃなく、ご主人
様の母親の立場だったら良かったのにっ♥』

ニセモノの家族とはいえ、信頼してきた“ハハ”の
心の声はアーニヤをさらに動揺させた。

“ご主人様”は誰なのか？
アーニヤには心当たりのある人間は一人しかいない。

きっとこの家で待っている666の紋章を持つ、あ
の男だ。

大広間を抜けて、中庭に出た。

大きな円形のテーブルの上にティーセットが並べら
れている。

すでに一人の女性が優雅に座ってティーカップを囁
っていた。

「待ちくたびれたぞ、ヨル・フォージャー」

冷徹な視線を向けてくる彼女は、見るからに只者で
はないと分かる。

鋼鉄の淑女（フルメタル・レディ）の眼光は、小心
者なら睨まれただけで萎縮してしまうだろう。

「申し訳ございません、この子を連れてこないとい
けなかったのだ」

頭を下げたヨルはアーニヤの頭を抑えて、会釈させ
る。

突然のことにアーニヤも戸惑っていた。

シルヴィア・シャーウッドは柔和に躲すヨルを睨む
のをやめない。

「一体、誰の指示だ？

子連れでこの“マッド・ティー・パーティー”に来
ようなどと」

「あら？

シルヴィアには伝えてなかったかしら？
それは“うちの子”が言い出したのよ」

メリンダが割って入るように、助け舟を出した。

“あの御方”が？」と呟いて、シルヴィアは口ご
もる。

“うちの子”と“あの御方”が一致しない。

でもシルヴィアの心の中を覗けるアーニヤは疑問に
感じなかった。

『そ、そんなまさか……！

御学友とはいえ……ご主人様はこの娘も牝豚ハーレ
ムに加えるつもりなのか？

母親と一緒に……ううっ！そんな事が許される訳が
……

だがご主人様には逆らえない。

ご命令があれば……

まずはケツ穴からローションでじっくり拡げて、快
楽を仕込まねばなるまい♥

仕方が……仕方がないのだ♪』

変わらない鋭い視線に、じっとりと変態的な色が灯
る。

怖い……怖い……

アーニヤは震えが止まらない。

次男は本当に何を考えているのだろうか？

ここにいる3人の女性を手籠めにして、意のままに
操っている。

全員が心の強い人間だと分かるのに、それをいとも
簡単にへし折って服従させてしまう。

次男は恐ろしい……

もう会いたくない。

「はは、おなかイタイかも……」

アーニヤはヨルの服の裾を引っ張ると、踵を返そう
とする。

すると後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、アーニ
ヤは驚き跳ね上がった。

「ようこそ。デズモンドの“マッド・ティー・パー
ティー”に。

アーニヤ・フォージャー。

来てくれると思ってたぜ」

「じ、じなん……」

余裕たっぷりの不敵な笑みを浮かべた少年が、アーニャに手を差し伸べていた。

「い、いや……」

本当はブラックベルにも声をかけたんだけど。

まだ“母親”の説得が途中だから、さ。

ふんっ！時間の問題だと思うけど」

不遜な態度。

偉そうに見下す癖に、どこか子供っぽいところも変わらない。

イーデンで星（ステラ）に雷（トント）と一喜一憂しているあの次男がそこにいた。

だがアーニャはそれが仮の姿だと知っている。

“演じている”のだと分かる。

「座れよ。」

最高級の氷菓子を用意してある。

お前の為に“特別”にな。

好きだろう？知ってるんだぜ」

「そうなの♪アーニャちゃんは甘いものが大好きだってヨルさんから聞いていたから♪」

メリンダがすり寄るように相槌を打つ。

そんな彼女にダミアンはキッと一瞥をくれた。

「ひっ」

短く悲鳴をあげると、メリンダは後ずさりする。

母親ですら支配している悪魔。

だがメリンダの心の中は恐怖故ではなかった。

『ああっ♪私の出しゃばり癖がこんなところでも出てしまったわ♥

いつも誰かがおしゃぶり奉仕しているのを横入りして怒られているのに♪

だってえ……つい身体が動いちゃうんだもの。

ご主人様に足蹴にされたってえ……私だってオチンポ様ナメナメしたいのお♥』

アーニャにバレないように身を振るメリンダは想像以上に変態だった。

息子のオチンチンに群がるなんて、考えただけで吐き気がする。

「ダミアン様が仰っているとおりにしましょう♥

さあ、アーニャさん。

こちらに座ってください♪」

ヨルが甲斐甲斐しく椅子を引き、笑顔でアーニャを招く。

ダミアンの誘いに従うことをアーニャに促すように。

アーニャは味方が誰一人いない状況に逆らえない。恐る恐る席へと近づくと、少し高めの椅子へ手をかけた。

届かない高さではなかったが、ヨルがサポートしてくれる。

すると神出鬼没なダミアンがピッタリと寄り添うように、席に座っていた。

「一緒に愉しもうぜ。

そ、そのなんだ……お、お前は……

将来の……いや……なんでもない……」

ダミアンが顔を赤らめて、口ごもる。

白々しさがあるのに、嘘じゃなさそうだ。

色恋沙汰に疎いアーニャでも、彼の考えは分かる。

ここにいる3人ではなく、自分を伴侶にしたいと考えているのだ。

ダミアンは。

『まさか……！

ご主人様の想い人が、こんなお子様だというのか？

信じられない……同年代というだけで……

こんなご主人様の極太チンポ様を受け入れられるはずがないミニ豚に！？

ご主人様を満足させる事が出来るのは、我々のような年増豚だろうに』

シルヴィアは困惑しながら、無表情は崩さない。

だが心の中は一気に煮えたぎっていた。

『そんな予感はありませんでしたが、ご主人様はアーニャさんを一人前の牝豚奴隷として育てるおつもりなのですね♪

完璧に自分好みの……精液が大好きな変態に♥

ああっ♪アーニャさんの年齢から、ダミアン様に出

会っていたらあ……

私だってもっともってご主人様に愛して貰える牝豚になれていたでしょうに……

羨ましいです、アーニャさん』

人を羨望することなんて、確実になかっただろうどこか達観しているヨルでさえ心中複雑なようだ。

『この子がデズモンドに来てしまったらあ……母親豚の役目は終わってしまうかも知れないわね。』

そんなの駄目よ。永遠に……私はご主人様のお側にいるのよ。

邪魔はさせないわ』

静かに殺意すら漲らせるメリンダが一番、恐ろしい。出される飲み物などには注意しないといけない。

アーニヤはこの針の筵から逃げ出したくてたまらなかった。

だから一か八か、隣にいるダミアンの手を握る。

「お、おまえっ……！」

みんなの前で！」

子供らしい初々しい赤ら顔を浮かべるダミアンもどこか嬉しそうだ。

「じなん、ふたりきりがいいかも」

耳元で囁いて誘う。

必死のアーニヤは自分が小悪魔的な振る舞いをしてることには気付かない。

「コイツラの事は気にするなよ。

せっかくの“マッド・ティー・パーティー”なんだからさ」

ダミアンが男らしく握り返してくる。

「そのマッドなんたらって……なに？」

アーニヤは間髪入れずにつっこむ。

得体の知れないダミアンと、彼に心酔する女たちの催すパーティー。

きっと碌なものじゃない。

ダミアンが口を開くより先に、ヨル達の方から思念が流れ込んできた。

『本当に初心で何も知らないアーニヤさん♪

ご主人様が私達牝豚奴隷と“お茶会”といったら、濃厚ザーメンを飲ませて頂けるに決まっているじゃないですか♥

アーニヤさんの味わったことのない大人の味っ♪

ああっ……♥涎が止まりません♥

早くっ……早くっ♪』

『この子を排除しないということは、見せつけてあげるのかしら？

本当に悪魔ね♪トラウマになって男性不信となれば、いざという時に困るかも知れないのに。

でもお……んふうっ♥ご主人様の極太チンポ様に犯

されているのを見たらあ……

この子だってきつと発情しちゃうわ。

罪作りの子ね♥素敵……♥』

『くっ……！すぐにでもチンポ様が欲しいというのに。

聞き分けのない子供との戯言など、ご主人様には不要だ。

我々のような熟れた牝豚の身体でしか満足させられないのは、ご主人様も知っているはず！

その証拠にご主人様の牝豚奴隷は全員、揃いも揃ってデカパイ牝豚揃いなのだから♥
将来はともかく……今は我々に分がある♥』

「ああ。ここは俺達が大人になる為のマナーを学ぶ場さ。

社交界にデビューするなら、作法は身につけておかないとな。

特にお前は……えっと……

色々とテキトーだから」

「アーニヤ、じなんよりしっかりしてる」

ヨル達の思念に震えながら、アーニヤはダミアンには自然とツッコミを入れられていた。

もうここにしか日常がないという地獄の有様だ。

心の読めないダミアンが一番安心出来る。

他の3人のどす黒い欲望に押し潰されそうになる。

「なっ！？皆の前で……！」

ふんっ！じゃあ見せてみる。

お茶を零さず飲めたら褒めてやるからっ！」

すかさず給仕係の女性が目の前にティーカップを置いた。

湯気のアがる紅茶は見るからに苦そうで、アーニヤはゲンナリとする。

しばらく卓上を見つめていると、ダミアンがニヤニヤと意地悪に笑う。

「お前、もしかして猫舌か？

本当に子供だな。」

でもフーフーしちゃいけないぐらいは分かるんだ。
偉いじゃないかっ」

アーニャはダミアンを睨みつけながら、紅茶を手に取った。
それを飲むとして躊躇する。

その時だった。

「あっ！
俺、トイレがまだだった。

せつかくパーティーが始まるっていうのに、駄目だよな。

うっかりしてたわ。

ちよっと席を外すから……その間に飲み干しておけよ。

あの校長が言うようにエレガントにな」

不意にダミアンはアーニャの肩を叩くと、ひょいと椅子から飛び退く。

そして手をヒラヒラと振りながら、離れていった。

「わけがわからない……じなん」

アーニャはお茶会がどういうものなのかは分からないが、トイレで中座することが失礼になるぐらいは知っている。

昔の人が王様に会うのに、お通じを我慢しすぎて、悶絶死したエピソードとかを見た記憶がある。

「わ、わたしも……！
実はお手洗いがまだでしたっ！
ご、ごめんなさいっ！」

ヨルが突然、立ち上がりアーニャはビクツと驚く。
すかさず、メリンダとシルヴィアも色めき立つ。

「先を急ぐわねっ、順番になったら困るから」

「すまない……！もう我慢が出来ないのだ」

大人3人が先を争うように、ダミアンに付いていった。

一人残されたアーニャは呆然としている。

3人の心の声はアーニャをさらに茫然自失にさせるものだった。

『ご主人様あっ♡

精液排泄用お便器、ヨル・ブライトをお使いくださいっ♪

チンポお♡チンポっ♡』

『まだでしゃばるつもりなのね、ヨル。
でもお気に入りの性処理便器は私です。

チンポお♡チンポっ♡』

『トイレで醜く盛りながら種媚びする……

なんて浅ましい姿なんだ♡

だが便器として使って頂けるなら本望だ♪

チンポお♡チンポっ♡』

「えっ……はは達がトイレ……？」

誰もいなくなり静かになった円卓に一人取り残されたアーニャは、訳のわからない想像が駆け巡ってブルブルと震えるしかなかった。

—————

「俺はこんなこと命令してないだろ？」

便器はそっちにあるので間に合ってる。
わかってんのかよ」

ダミアンは溜息をつきながら、3人を叱責する。

それぞれ正装に身を包んだヨル、メリンダ、シルヴィアは服装が乱れるのを気にしないでとも言うように、便所の床に座り込むと揃って媚び顔で口をパクパクと開いた。

「は、はいっ♡

ですが……我慢できなくてえ……

この便器を使ってくださいっ！

お茶会用の濃厚精液を絞り出す牝マンコの役目を私にやらせてくださいっ♡

お願いしますっ♪」

「いつも机の下でおしゃぶりするのは母の役目でしたっ♡

でもあの子が……いるからあ……

はしたない真似は我慢したのですっ！

ですからあ……せめてお便器の役目は私にさせて欲しいわ♡

オチンポ様をお恵みくださいっ♪」

「意地汚い牝便器を使いたくないとご主人様が仰るなら仕方ない……

ですが陶磁器の置物では、バキュームフェラもパイズリも出来ません。

ご主人様がすでに元気にされている……
うじめるうっ♡そのオチンポ様にフィットするのはあ……

きつと私の口便器でありましょう♥」

3人ともに唇と舌に人差し指を当て、便器アピールをする。

争いながらも仲良く顔を並べる彼女たちを見下しながら、ダミアンもムクムクとズボンの股間を盛り上げらせる。

「しかたねえな。」

使ってやるから、しゃぶりつけよ」

「ありがとうございますっ♪ご主人様♥」

誰よりも反射神経のいいヨルがすかさずダミアンのズボンに顔を擦り付ける。

そして齒で器用にジッパーを下げていく。

「まあ、すごい♥」

「やはりご主人様のオチンポ様は格が違う♥」

開放されてムクリと起き上がった勃起チンポに、3人は目の色を変えた。

そして仲良く舌を突き出し、しゃぶりつく。

「じゅるううっ♪んっ♥

はむうっんっ……うふうっ♪

ちゅううっ……すごい匂いっ♥

ご主人様もアーニャさんの前で興奮されてたんですね♪」

「それはそうよっ♪

んんふうっ……あむっ♥

私達が牝媚びしているのを、あんな可愛い子に見せ

つけていたんだからあ♪
最高の牡としての姿をね……うじゅうううっ♥」

「じゅぶうっ……うむうっ♪

チュポ、ジュポっ♥

美味しい♪チンポ様あ！

ああっ♥宜しければ、あの子の調教を私達年増牝豚

にお任せください！

必ずご満足頂ける奴隷に仕上げてみせますから！」

3人は嬉しそうに頬張りながら、ダミアンにすり寄る。

意地汚い様子は、普段の彼女らからはとても想像できない。

「そんな愉しいことをお前らなんか任せると思うか？

本当にバカだな。

それよりもお前らはやるべき事があるだろ？

自分たちで言い出したんだからさ」

ダミアンは冷ややかに言い放つと、腰を意地悪に振る。

はねたチンポが女達の口から外れ、ヨルの顔をペチペチと撫でた。

女たちは動揺する事もなく、吸い寄せられるようにまたしロしロと舌を自然と這わせていく。

「ちゅるううっ……はむうっ♥

んんぶううっ……じゅるるう♪じゅぶうぶっ♥

市役所の御三方ですね。

写真でお見せしたあ……はふうっ♥

一人は人妻。一人は同僚とお付き合ひしています♪

でもお……全員、ご主人様のオチンポ様には興味津々でした♪

寝取り放題かとおっ♥うじゅるううっ♪

期待されてますね！ああっ♥ご主人様のオチンポ様が喜んでりゆうっ♥」

ヨルはダミアンの気を引く為に、バーリント市役所の同僚を捧げることが誓っていたのだ。

ミリー、カミラ、シャロンの魅力的なお姉様達の事を思い出しながら、ダミアンは舌なめずりする。

「お前と一緒に制服で犯してやるのもいいなっ！

ふうっ。市職員の制服は可愛げがないと思ってただけど、お前らみたいな美人が着たら別物だ。

ノーパンノーブラで奉仕させてやる」

セクハラオヤジみたいな事を高笑いしながら話すダミアンに、ヨルは目を細めて「仰せのままに♪ご主人様♥」と従順に阿った。

「んふうううっ♪私もヨルさんを捧げたことでご主人様を満足させたなんて思っています♥

ちゅるうっ！んちゅうっ♥

バレエ仲間の中で一番可愛かったのは、彼女だっただけえっ♪

ですからママ友全員のケツ振り乳出しバレエを実現することの第一歩です♥

これからしっかりと籠絡し、ご主人様の虜にしてみせますっ♥」

ヨルをダミアンに売ったのは、メリンダだった。

ママ友バレエをメリンダが始めたのは、獲物を物色するため。

ヨルはまんまとその網に引っかったのだ。
もちろんヨルもその事を後で聞いた。

そして今ではメリンダに嬉々として協力している。

「いいよな！飛んだり跳ねたりして！

熟れた乳が上に下に！

下品で豚みたいだ！でももっと無様にしてやりた
い」

母親達を豚呼ばわりするダミアンを、メリンダはた
しなめたりしない。

「ぶひいっ♥」と豚鳴きをしてただ媚びる。

「はむううっ♪んぶうっ♥

こちらに潜入させた夜帷の使い勝手はいかがです
か？

出来る限りの媚び笑顔を教え込んだのですが♪

じゅるううっ♪ちゅばちゅるううっ……♥」

シルヴィアは任務と騙して、デズモンド邸にメイド
としてフィオナを送り込んだ。

ダミアンに性的なイタズラをされながら、必死で耐
え忍んでいるのは本人から報告を受けている。

まだ身体は許していないようだが、時間の問題だと
シルヴィアは考えていた。

反骨心の塊のようなフィオナを籠絡することは、ダ
ミアンの歡びだとシルヴィアも知っている。

だからこそ彼女を選んで捧げたのだ。

「ああ、あの無愛想な女ね。

この前にお仕置きで尻を叩いてやったら、途中から
ケツ振ってたな。

アイツ、お前そっくりのマゾ豚だぜ。

お前と並んでぶっ叩いてやったら、もっと良い声で
鳴くんじゃないかあ？」

ダミアンがケラケラと嘲笑う。

シルヴィアはそれが最上の喜びというように、尻尾
を振る犬のようにお尻をくねらせた。

ダミアンの魔性に取り込まれた者は、周りの人間を
も巻き込んでいく。

そして悪魔の眷属を増殖させていくのだ。

もちろん、女たちだけでなく、男も例外じゃない。

「そういえば、さ。

ロイドだっけ。

アイツも、もうすぐいい感じに壊れちゃうんじゃない
か？

ドノバンみたいに。

そしたら使い勝手がよくなりそうじゃん。
有能そうだし。

ドノバンは成功例だからな。

他のバカどもは廃人になって期待外れだったけど。
ドノバン2号が出来たら、俺ももっと楽になるかな

くはははっ！」

「はいっ♥

うじゅるうううっ……♪んぶうっ♪

メリンダさんに教えて頂いたお薬を仕込んだら、す
ごく従順になってしまっつて。

このまま仕込んでいけば、ドノバンさんのように“
使い勝手のいい奴隷”になってくれると思います♥

しロしロオ……んんっ♥

ご期待くださいいっ♥♥♥」

邪悪すぎるダミアンに、ヨルは盲信してしまってい
た。

ただ彼が望むままに、ロイドを貶めていく。
嬉々として。それが当然というように。

「んんおおっ♥

ロイドが我々と同じ、ご主人様の手駒になれば心強
い♪

あの男は優秀だからな。

私も協力するぞ、ヨル・フォージャー。

じゅるううっちゅばあっ♥」

シルヴィアもロイドを助けようなんて微塵も考えな
い。

それどころか自ら進んで加担しようとする。

「ははははっ！

お前らは本当に面白いなっ！
まずは一発目。

ザーメンくれてやるけど、誰のロマンコがいい？」

ダミアンは腰をクイクイと振り、3人に促した。

ヨル達は目の色を輝かせて、同時に「「「私に
♥「「」とチンポの舌でポジションを争う。

「ベロレロオオッ♥

チンポ汁をくらしやいいいっ……！

母ロマンコにいっ！いっばいいいっばいいいっ♥
うべえええっ……♪」

「レロオオッ……んちゅううっ♥

私が一番、欲しがりなんですうっ♪

ご主人様が許してくれるなら、二人をぶっ飛ばして独占したいぐらいにいつ♥

あはあっ♪チンポ汁う♥チンポおおっ♪」

「マッド・ティー・パーティーが楽しみなのはあはっ♪

このチンポ汁がいったい味わえるからあはっ♥
ちゅるううっ…!んんふうっ♥

メガネもザーメンまみれにしてええっ♥♥♥

「必死になって無様だな。

仲良く分け合う気はないのかよ」

ヤレヤレと嘲るようにダミアンが頭を振る。

だが3人に意に返さない。

ダミアンのイチモツがピンピンとさらに元気になってきたからだ。

選ばれる為に必死だ。

そして3人ともダミアンが“どうしたいか?”を知っている。

だから雛鳥のように舌を突き出すと、口では喧嘩しながら、顔を寄せ合った。

「くううっ!

最高の媚び顔だぜ。

ははっ!くれてやるよ、ぶち撒けてやるっ!」

「「「うべええっっ♥チンポおおっ♥♥♥」」」

ビュルウウウッ……!ビュルビュルウウウッ……!!

3人の口に収まらないレベルの凄まじいザーメンの奔流が降り注ぐ。

あまりに量の多い射精がダミアンのチンポの力を示している。

3人の顔がビチャビチャに精液で汚されていく。

だがヨル達は全てをしっかりと顔面で受け止めていた。

そしてまた仲良く声を揃える。

「「「チンポ汁う♥ありがとうございますっ、ご主人様♥」」」



「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「いちじかんもまった」

抗議しながら横手に見たダミアンの額。
666の数字が刻まれた痣が、どことなく赤く光って見えた。

「うっ……」

だが恐怖よりも先に、臭いにアーニヤは氣を取られる。
生臭い「何か」がツンと鼻をよぎったからだ。

その強烈な臭いは、ダミアンから立ち上っていた。

「なんの……におい……？」

「わかるのかよ？」

「はっ！まあ……いずれお前も大好きになるって。四六時中、自分の身体からこの臭いを漂わせてないと気が済まないぐらいに、な」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「さあ準備は整った。」

「マッド・ティー・パーティーを再開しようぜ」

「トイレにいっただけ。じなんもははたちも」

呆れた様子でジト目をするアーニヤをダミアンは無視する。

アーニヤはこの得体の知れない男の心の中が読めないことが何より不安で仕方がない。

「お待たせしましたっ……」

「んっ♥アーニヤさん」

いつの間にかヨル達が出てきていた。

それぞれが座りにくそうに身体を振りながら、着席していく。

ダミアンと逆隣に座ったヨルから、何かが臭った。

「はは、あせ……」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

ヨルがニッコリと微笑む。

その屈託のない笑顔とは裏腹に、口元には縮れた毛がこびりついていた。

汗をかいただけじゃない。得体の知れないものを被ったみたいに顔面が何かでテカっている。

上品なメリンダも、気丈なシルヴィアも同様だ。

髪の毛が肌にひっついて奇妙に見える。

全員がそれでいて気にもとめていないようだ。

むしろ誇らしげにしている。

アーニヤは、ダミアンから漂っていた生臭さの正体を知った。

流れ込んでくる3人の心の声で。

『ふふっ♪アーニヤさんもご主人様のザーメン臭に

気付いたんですね。

「……」
「待たせたな。」
「おっ！飲めてるじゃん。」
「これで苦いのもいけるな」

でもまだアーニヤさんはお気に召さないようです。

仕方ありません。中出してメスイキする奴隷の気持ち良さをアーニヤさんは知らないのですから♥

ちっさくてご主人様のデカチンポ様を受け入れられないのは、本当に可哀想です……

でもお……フェラ豚ぐらいにはなれるかもですね♪

私と一緒にザーメン排泄用便器に……♥

ああ、楽しみです♪』

『今日のご主人様もすごかったわあっ♥

私達3人を並べて、ケツ振りさせただけじゃなく、

全員に中出ししてくれるなんて♪

しかも……それをマッド・ティー・パーティーでア

ーニャちゃんの前で啜ってみせろっていうんですもの。
男らしいわあっ♥たまらない……

ご主人様以外のオスなんて、考えられない♪

一生ついていきます、ご主人様♥

母親便器をいつまでも使い込んでくださいませえ……
…うふうっ♥』

『ぬうつ……

唇付近のザーメンは全て舐め取ってしまった……
くそ。もう味がしない。

追加でおかわりをお願いしたいが、あの子の前では
難しいだろうな。

あまりに美味しすぎて無計画に舐めすぎてしまった
♥

んんっ♪でも髪の毛から匂いが漂ってくるうつ♥
舐めしゃぶりたい♪

駄目だ……私はご主人様の舐め犬にさせていただいた
ことで、舞い上がりすぎている。

ご主人様が許可してくれるまでは……我慢しなければ……

あううつ♥ザーメン……♥』

「あっ……ああ……」

呆然とするアーニャをよそに、ダミアンはクイツと
何かを飲むような動作をする。

その様子を見た3人はティーカップを円卓の下へと
堂々と忍ばせた。

テーブルクロスで何をしているは見えない。

だがそれぞれが「おっ♥おっ♥」と喘ぎながら、身体を震わせていた。
全員が嬉しそうに頬を赤く染めている。
そしてティーカップを取り出す。

何事もなかったように、並々と白濁液の入ったソレ
をソーサーに並べた。

「じゃあ改めて♪

マッド・ティー・パーティーを始めましょうか♥

ね？ヨルさん、シルヴィアさん……
ごしゅ……ダミアンとアーニャさんも」

メリンダが仕切り直しを宣言する。

アーニャ以外の全員が頷く。

そして「いただきます♥」と舌なめずりをした。
エレガントなテーブルマナーには程遠いズビズビ音を
立てながら、ヨル達が啜る。

悪夢は始まったばかりだ。
アーニャはただただ戦慄していた。

ヨル心の声がさらにアーニャを追いつめる。

『んふううつ♥

ご主人様のチンポ汁う……美味しすぎますうつ♪
もっともっと頂きたいです♥

ですが今度はアーニャさんの前で、ご主人様の偉大
さを見せつけるまで我慢なんですネ……

ドマゾロイドさんとご主人様を並べて射精対決させ
る。

どちらが最も優秀なオスカを、何も知らないお子様
のアーニャさんにも分かるようにいつ♥』

(ちち……さらにぴんち……)

怯えるアーニャを横目に見ながら、ダミアンはほく
そ笑む。

(まだあの男を信頼してるみたいだな。

どこまでもへし折ってやるよ。

お前には俺しかいないんだって……わからせてや
る)

どす黒い心の声。

それはアーニャには届かない声。

そして……ダミアンがアーニャと“同じ能力”を持
っているからこそ分かること。

「次はお前ん家でパーティーだな。

誘って貰ったら、お返しは基本だぜ」

ダミアンはまた邪悪に微笑む。

少しずつ。でも確実に……純粋なアーニャの心を闇
に染めていくことを自覚しながら。

悪魔の子はそれを心の底から愉しんでいた。

あとがき

当本をお手に取って頂きありがとうございます！
SPY×FAMILYで宗教洗脳本。東西冷戦下の不安な
状況下なら変な宗教とかあってもおかしくないなと
思ったので思い切ってやってみました。

ヨルさん思う存分描けて満足してます！
次回はフィオナがつつり描きたい！他の未登場のキャラなども！

毎度のことながら反省点や無理くりなところ
多々ではありますが、楽しんで頂けたらいいなと
思っております。

なんにせよこれからも色々と描きながら精進していきたいと
思いますので、良ければまた自分の本お手に取って頂けたら
幸いです！！

改めて、読んで頂きありがとうございました！！

奥付け

- 発行・著者 さなつき
- サークル アヘアジフ
- Email neko998-aheaji@yahoo.co.jp
- Pixiv [41042507](https://www.pixiv.net/users/41042507)
- Twitter [@sanatuki0510](https://twitter.com/sanatuki0510)
- 印刷 ねこのしっぽ様
- 発行 2026/8/16

日高さんエチエチな
小説感謝でした！！
続きが楽しみ！！

スパイ×NTRファミリー

～悪魔の子に関わったばかりに寝取られてしまう大切な人達～

- 著者 日高久志
- pixiv <http://pixiv.net/users/4853918>
- ノクターン <http://xmypage.syosetu.com/x8371q/>

**制作
アヘアジフ**

**この作品は
二次創作であり
原作とは一切関係ありません**

複製を禁止する